

去る9月、イギリスを旅してきた。スコットランドのエジンバラから湖水地方を経て「嵐が丘」のハワース、“シェイクスピア”のストラッドフォード・アポン・エイボン、“ビートルズ”のリバプール、史跡ストーンヘンジや首都のロンドン等々を廻る10日間だ。



出発直前の8月中旬にヒースロー空港で米機対象のテロ計画が未然に回避された直後でもあり、空港の警備は厳重を極めた。関空からヒースローまではそうでもなかったが、ヒースローからグラスゴー行きのローカル航空ブリティッシュ・ミッドランドの乗り換えは大変だった。機内への各自持ち込み手荷物は一つのみ。大きさは35cm×45cmの大きさで厚さ16cm以下とまるでアタッシュケース並みの大きさに制限される。私の鞆はビデオ機材が入っているのでサイズ面だけで許可されなかった。また女性の化粧品、特に口紅や香水、ジェル状のもの、ペットボトル等液体は全て駄目。搭乗まえの通過ゲイトで没収された。靴まで脱がされ裸足でゲイトを通過させられた。

しかし英国内に入ってから旅はまずは快適に推移できた。先進国の英国にあれほど広い自然が存在し、緑に包まれた平野が果てしなく続くとは全く予想外だった。

《エジンバラ》

先ずスコットランドの北西の都市エジンバラからスタートした。エジンバラはスコットランドの首都であり、旧市街と新市街の美しい町並みは世界遺産に指定されている。街の高台に建つエジンバラ城はその起源が7世紀と古く、日曜日を除く毎日13時には城の大砲が鳴り響く。またスコットランドの数々の歴史を秘めたホリールード宮殿は女王の滞在場所であり、歴代の王が住んだ宮殿だ。落ち着いた街とこれら観光ポイントを見学。そこから南下して次のイングランドの湖水地方に向った。



高い山の少ないスコットランドの平野が広々と続き、のんびりした羊の牧場や草原が、バスの両側の車窓にいつまでも展開する。

《湖水地方》

ピーターラビットの作者ベアトリクス・ポターやイギリスのロマン派詩人ワーズワースがこよなく愛したという



湖水地方。そのワーズワースが長年住んだダブコテージの近くのホテルに宿泊した。すぐ裏にはまるで絵のように美しいグラスミア湖が広がっている。先ず湖を一周してみたいとの欲求に駆られた。我々のツアーのスケジュールはぎっしりで、気ままな湖の周遊など余程無理しない限りできるものではない。ツアースケジュールに沿ってワーズワースの晩年の住まいだったライダルマウントからダブコテージまでの散歩道、英国特有のフット・パスも歩いてみたがこれでは物足りない。

自由時間は夜の7時半以降となる。だが北海道よりも緯度の高いイングランドは、この時間にはまだほの暗い光が残っていた。バスの運転手に聞くと、夕闇でもグラスミア湖を一周することは可能だという。一周約6キロ前後だ。一念発起して一人歩くことにした。だが予め聞いた道は決して分かりやすいものではなかった。日が暮れると無人の道は次第に見分けがつかなくなり、とつぷりと闇に包まれると全くの迷路と化した。人は居ない。ときたま通りがかる車に手を挙げて道を聞こうと試みたが、この暗さでは車も警戒して停まってくれない。

遠くに灯りが見えた。近付いてみると瀟洒な一軒家が建っている。しつこくノックしてみたがこれも警戒しているのか誰も現れない。仕方なく我が方向感覚を信じて、下方の湖へと暗がりの森の中に足を踏み入れた。そして細心の注意を払いながら下った急斜面で足を滑らし、2mほどの崖を滑り落ちた。膝を擦りむき、腰をしたたかに打ち、そして頭もやや痛打した。しばらくは動けなかった。だが束の間の休憩で回復し、湖面まで苦労して下り、水辺沿いに迂回してどうにかホテル近くの道を見つめることが出来た。道をさまようこと2時間。将に旅のハプニングである。しかも旅のスタート地点で。幸い大怪我でなく助かったが、70歳という我が年齢にしては無鉄砲過ぎたかな・・・と反省し



ている。だが翌朝、痛む足を庇いながら昨夜のコースを逆にたどり、徒歩で湖一周を完遂した。お陰で素晴らしい湖面の景色を堪能できた。

《ハワース》

ハワースではエミリー・ブロンテの小説「嵐が丘」を連想して、ヒースの花やムーア（荒野）を期待して見学したが、ブロンテ姉妹の住んだ家（ブロンテミュージアム）やブロンテ姉妹の父が牧師だったハワース・パリスシュ・チャーチを見ただけだ。このチャーチにはブロンテ姉妹が埋葬されている。期待したムーア（荒野）は時代の推移で環境が変わったのか、近くには見当たらず心残りだった。



《リヴァプール》

リヴァプールはビートルズの出身地だ。英国国教会系で世界最大の規模といわれるリヴァプール大聖堂と共に、ビートルズのファンなら必ず訪れるというビートルズ・ストーリーがある。それはリヴァプールの再開発地区を代表する一大コンプレックスアルバート・ドックの地階にあった。そこではビートルズのサウンドを聴きながら彼らの歴史をたどることが出来る。我々の年代にとって興味あるビートルズなのだが、私にはそれほど魅力は感じられなかった。むしろ巨大な大聖堂とマージー川沿いの建築物や倉庫街、また古い埠頭など一連の町並みが世界遺産に指定されており、むしろそちらに興味を感じた。



この後、中世の雰囲気の色濃く残すチェスターの街を周遊し、世界で初めて建造されたという鉄の橋、アイアンブリッジを訪問した。

《ストラットフォード・アポン・エイボン》

次はシェイクスピアの生誕地ストラットフォード・アポン・エイボンに向った。1564年彼はこの町で生を受け、1616年この町で没している。シェイクスピアの生家には彼の当時の生活の様子が実物とレプリカで再現されている。また彼の8歳年上の妻アン・ハザウエイもこの近くで生まれている。妻の実家はシェイクスピアのそれよりも裕福だったのか、家も立派だし大きく庭も広い。今は数本のりんごの木が一杯実をつけていた。



シェイクスピアが何故8歳も年上の女房持ちとなったかは、今で言う「出来ちゃった結婚」だったそうだ。彼が18歳、ハザウエイが26歳のときだという。

エイボン川の畔にあるこの町は、400年前のシェイクスピアだけで、今も絶え間なく観光客の訪れる町なのだ。町の南にある聖トリニティ教会の祭壇の下にシェイクスピアとアン・ハザウエイの墓がある。祭壇の床面には彼の意向だったのか以下の文言が掘り込まれていた。「どうかよき友よ、ここに眠る亡骸を乱すことなかれ。この墓石を惜しむ者に幸あれ。骨に触れる者に呪いあれ。」

我々の旅は絵葉書のように美しい村々が点在するコッツウォルズ地方からイギリス西部の港湾都市ブリストルを経由し、バースに向った。

《バース》

ローマ時代に温泉の町として栄えたバースは、風呂（Bath）の語源ともなった有名な観光都市だ。紀元前1世紀にローマ人によって建てられたローマン・バスがここには存在し、アルプス以北では最も保存状態のよいローマ遺跡の一つだという。古代の一大保養地であり、今も大きな浴場に満々と水を湛えていた。

ローマン・バスの近くには、史上初のイングランドの統一王となったエドガー王が、993年に戴冠式を行ったというバース・アビー（寺院）もある。そのアビーとローマン・バスの前は広場になっていて、路上パフォーマンスの若者がビブラフォンの演奏を派手にやっていた。それを聴くともなく楽しんでいる若い東洋人夫婦が大きな犬をつれてベンチに座っていた。日本語で声を掛けて



みた。思ったとおりその夫婦は日本人で、ロンドンで小児科の医師をしているという。そして出身は岡山大学医学部だという。何と身近な日本人とイギリスの片田舎バースでめぐり合ったものだ。世の中狭いものだ。バースを発つと次はイギリス最古の遺跡ストーンヘンジだ。

《ストーンヘンジ》



ロンドンの近くに世界的レベルのミステリースポット謎の巨石群が広い野っばらに突っ立っている。高さ 7mほどの巨大な門の形の組石と 4~5mの立石が直径約 100mの円状に並んでいる。誰が何のために建設したのか未だ解明されていないようだ。ただ夏至の日にヒール・ストーンと呼ばれる高さ 6mの玄武岩と、中心にある祭壇石を結ぶ直線状に太陽が昇るというから、これらを作った往時の設計者にはあるいは天文学的素養があったのかも知らない。何しろ 5~6 千年も前の代物で、組石の技術とか巨石の運搬の術は果たしてどうだったのか、謎の多い遺跡だ。ゆっくりと周囲を廻って見ると、周りにはこんもりとした塚らしきもの

もある。将に考古学的宝庫の場といえよう。

《ロンドン》

旅の最後はロンドンだ。世界の最もエネルギッシュな都市のひとつ。ここまで比較的閑静なスコットランドから中世を中心に歴史を紐解いたり、あるいは積極的に残された広いイギリスの自然を満喫しながら南下して着いたロンドンだ。有名ポイントを見るとさすがに圧倒された。何度も訪れたことのある人は別だろうが、初めての私には見るもの聞くもの全てが新鮮だった。



初日、バスで観光したウエストミンスター宮殿周辺は、ロンドン観光のハイライトの一つと云える。バッキンガム宮殿の有名な衛兵の交代式も、驚くほど混雑する観光客の中から遠くに眺めた。午後のフリータイムは、ビッグベンからテムズ川を渡った所にある世界の観覧車ロンドン・アイに乗ってみた。2000年に出来たロンドンの新しい観光スポットだが、直径 135m。ロンドンで 4 番目の高さになり、公開されているものの中では最も高所に達することが出来る。1 台のゴンドラに 25 人乗れる巨大なものだ。チケットを求めるのに 40 分、ゴンドラで一周するのに 30 分だ。高所から眺めるロンドン市街と真下に見える。ウエストミンスター宮殿（国会議事堂）は圧巻だ。



翌日は、有名スポットの土地勘を掴むべくホテルから 6~7 キロの道を一人で歩いて、前日と同じ場所を観て廻った。二日目に傷めた右膝の痛みは、一向に良くならなかったが歩けば慣れる。ホテルからハイドパークを横切り、サーペンタイン湖の先のケンジントン公園を眺め、ロンドン切っての繁華街ピカデリー通りを通って中心街ピカデリーサーカスに至る。そしてトラファルガー広場を周遊した。国立美術館では膨大な絵画を、そして大英博物館ではかつてカイロで見ることの出来なかったエジプトのロゼッタストーンを中心に、古代エジプトのミイラやギリシャの彫刻物に堪能した。イギリスはどの美術館も博物館も入場料が無料。気が向けば何某かの寄付をすればよい。観ればきりが無いが、精一杯動いた。



僅か 10 日間の旅だったが、今回も楽しいツアーだった。旅の醍醐味は見知らぬ街や景色を観て、その土地の雰囲気味わい、そしてその国の人との一期一会を楽しむことだ。それは何処に行ってもその目的を達することは出来る。金と暇さえあれば・・・だが今回の旅では如何にイギリスの物価が高いかを思い知らされた。何を買っても、何を食っても飲んでも日本の 5 割り増しか倍ではなかろうかと思えた。先進国は高いのだ。しかしこれも経験。見知らぬことは全て思い出として大切にしたい。

2006/10 寄稿